# 疑心

沢井誠は、ラーメン屋の前を通りすぎてから、左手を胸の下に当てた。

「吐き気」というほどのものではないが、何かモソモソと胃袋が持ち上がるような奇妙な感覚である。夜の盛り場の人ごみの中を足早に歩いていても、その感覚は突出して感じられたから、錯覚ではない。大体、これが初めてではない。掛かりつけの精神科の医師は、それを聞いて「なるほど」とうなずいてはくれるが、その表情は明らかに「気のせいだよ」と言っている。ところが沢井は、その表情を見ると安心するのだった。ひょっとすると、その表情を見たいがために精神科の門をくぐるのかもしれない、と時々思うことがある。自分自身が医者なのだから、科学的に説明できないことが自分の体の中で起こっているなどと、認めるわけにいかなかった。自分と同じ科学を学んだ専門家が、優しい眼差しで「それは錯覚だよ」と言ってくれることが、彼に安らぎを与えるのだった。

「これは妄想の一種だ」と自分に言い聞かせながら、沢井は新宿の裏通りを、また歩幅を広げて歩き始めた。新宿三丁目から靖国通りを渡り歌舞伎町へ向かおうとしていた彼だったが、足はなぜか駅の方へ引きつけられるのだった。この近辺で夜の食事をすることを、自分の胃袋が拒んでいるように感じられた。

「いや、これも妄想だ！」と、沢井は自分に再び言い聞かせる。しかし、食

欲は理性とは別のところで働いていることを認めざるを得なかった。

彼はその日、勤め先のK大病院で三人の患者の外科手術をすませ、疲れた体と神経を夜風に当てて慰めながら、新宿駅周辺までやってきたのだった。ここから西武新宿線に乗って三十分も行けば、自分の住む町に帰ることはできる。しかし、長時間の手術の後で、酔客の多い電車に揺られて家に帰ることを彼は好まなかった。立っていると疲れるというだけでなく、酔客の赤ら顔を見ていると、その胃や腸が赤く脹れて、肝臓の肥大した様子がアリアリと目の前に浮かんでくる。酔客の吐く酸えたような息を嗅げば、胃液とアルコールに浸された胃の内容物の様子が、勝手に頭の中に侵入する。そういう連想作用を断ち切るためには、自分が酔客になるのが一番なのだが、医者としての判断が邪魔をして、酔うほどの量を飲めない自分であることを、彼はよく知っていた。

「外科医としては神経が細やかだね」と先輩医師に言われたことを、沢井は思い出していた。それは誉め言葉でないことが分かっていたから、彼は当初反論しようと思ったこともある。しかし、それも大人げないので、今はそんな皮肉に対しては特上の笑顔を作ることに決めていた。

執刀後に腹がへるのは、スポーツ選手が試合後に腹がへるのと同じように、当たり前のことである。特に今日のように、難しい手術が成功した時などは、達成感と開放感も加わって、胃袋は盛んに報酬を要求する。それが普通だ。しかし、あのラーメン屋の前を通り、こってりとしたブタの脂肉の臭いを嗅

いでから、沢井は食欲以外のものをその胃袋に感じた。その違和感は時々起こるのだが、今日はとりわけ強くそれを感じた。科学者としての自分の理性が「妄想だ！」と言い張っても、感じたことを感じないとは言えなかった。

「そろそろまた、三橋さんのところへ行く頃かな」と、彼は独り言を言った。

三橋良男は、沢井と同じK大病院に勤める精神科の医師である。

この病院に「術後カウンセリング」という新部門が作られた二〇〇五年に、三橋は初代の責任者として心療内科からそこへ着任した。この部門は、当時の先端医療であった同種間、異種間の臓器や組織移植の手術を受けた後、患者が抱く様々な心理的葛藤を解決させることが主な仕事だった。移植手術後の心理的葛藤には、例えば「他人からもらった自分の心臓が勝手に動いて困る」というような〝思い過ごし〟に類する単純なものから、「他人の神経細胞をもらった結果、記憶が蘇り、それにもとづいて本を書いた場合、その本は自分の作品と言えるかどうか」というような法律問題もからむ複雑なものまで、多種多様のものがあった。それらの問題を、弁護士などの専門職を含む十数人のスタッフと協力して解きほぐしていく――こういう煩雑で微妙な仕事が、三橋の担当する分野だった。

この「術後カウンセリング」へ来る患者は、人間から人間への臓器や組織移植が行われていた二〇〇七年までは、手術の件数が比較的少なかったこともあり、それほどの数にならなかった。しかし、二〇〇八年になって、ブタからの臓器移植の技術的問題が解決し、クローン技術の助けで人間に安全な

種類のブタが大量に製造されるようになると、ブタから人への異種間臓器移植を行った患者が、数多くの問題をカウンセリングに持ち込むようになっていた。沢井誠は、この病院で異種間臓器移植を行った最初の患者であり、また、異種間移植で三橋のカウンセリングを受けることとなった初期の患者の一人だった。

つまり、沢井の胃袋はブタから移植されたものだった。

そのことは、沢井にとって秘密でも何でもなかった。むしろ彼はそのことを誇りに思っていた。「ブタの胃袋」が自慢なのではなく、医学の力が、自然の障害を見事に乗り越えて、一時代前には〝奇蹟〟に等しかった偉業をなしとげたその証拠が、医師である自分自身の体の中にあることが誇りなのだった。この「胃袋」が健康に機能しているかぎり、自分が進んでいる医学の道は正しく、人類を価値ある未来に向かわせていると、沢井は実感することができるのだった。

だから彼は、自身が外科医として大勢の患者に接する時も、異種間移植を自信をもって勧めることができた。当初、臓器を病む多くの患者は、「ブタの臓器が使える」と聞いても、そんなものは「汚い」とか、「臭い」とか、「病気がうつる」とか、「気持が悪い」などと言って尻込みしたが、医師である沢井が、自分の胃はブタからもらったことを患者に告げ、移植以来大きな不都合はないという事実を自信たっぷりに話すことで、大抵の患者は彼の手による異種間臓器移植を希望するようになるのだった。その結果、彼の執刀によ

る手術の件数は増え、技術は向上し、沢井は今やK大病院での異種間臓器移植の第一人者と目されるようになっていた。

そんな彼が、時々三橋の「術後カウンセリング」を受けるなどということは、人に知られない方がいいに決まっている。だから、沢井が三橋に会いに行くときは、普段の仕事着である白衣のまま、患者の問題を相談するかのような態度を装って、晴れ晴れとした顔で、時には三橋のスタッフに冗談を飛ばしながら颯爽として行くのだった。また、そんな気分にどうしてもなれない時は、電話で話せば大抵は事足りた。

今回の問題も、そういうカウンセリングをもう一回重ねることでうまく処理できる、と沢井は軽く考えていた。

◇

翌日の夕方、三橋の診察室では、白衣姿の沢井が航空機の座席のようなリクライニング式の椅子に寄りかかって、天井を眺めていた。ベージュの布張りの天井には、調光式の間接照明の柔らかな光が当たっている。沢井は、この天井の薄暗い隅に、人の手を思わせる形をした小さな染みができているのを眺めていた。以前、三橋にそのことを尋ねると、上階の床下に通った排水管から水漏れした時の名残だと言った。沢井はそのことを思い出しながら、

「この染みは、見方によってはブタの横顔にも見える」と思った。

その時、

「やっぱり、ブタのことが気になりますか?」と、三橋の低い声が頭の後ろ

の方から聞こえた。

「ああ、そうだと思う」と、沢井は虚を突かれたように戸惑って答えた。

「異種移植では珍しくないことだと前にも話しましたね」と、三橋は専門家の丁寧さと注意深さで言った。「例の胃の感覚も、一種の連想作用から起こると考えられています」

「そういうことだろうとは僕も思うんだが」と沢井は天井に目を泳がせながら言った。「しかし、胃が本当に持ち上がったり、収縮したりする感覚は、脳内の神経細胞の働きだけでは起こりそうもないしね」

沢井は、三橋が自分より一回りほど年下であることを意識して、ちょっとぞんざいな言葉づかいをしていた。

「実際に胃が持ち上がっているということは、十分考えられます」と、三橋は何でもないかのように言った。

「えっ?」と沢井は聞き返した。

「ブタの臭いだと感じることで、胃の筋肉が実際に収縮するという可能性は十分考えられる、ということです」。言葉を選びながら、三橋はゆっくりと言った。

「それじゃ、気のせいじゃないということ?」と、沢井は思わず語気を強めて言った。

「その答えは、『気のせい』という言葉の意味しだいです」三橋はあくまでも落ち着いていた。

「どういうこと?」沢井は不機嫌に言った。

「つまり」と三橋は抑揚のない話し方で続けた。「脳などの中枢神経から自律神経とは別に体性神経のようなものが延びて、胃の筋肉と結びつくことが考えられるのです。それがなぜ起こるかは分かりませんが、ブタを意識しすぎることで起こるとしたら、『気のせい』でそうなるとも言うことができるからです」

しばらく沈黙が続いた。沢井は、三橋の言ったことを頭の中で整理していた。人間が自分の意志で腕や脚を動かせるのは、脳を中心とする中枢神経から延びた神経細胞の軸索が腕や脚の筋肉に結びついていて、そこへ「動け」という指令を伝えるからだが、それと同様の関係が脳と胃の筋肉に成立すれば、それは心の力が胃を実際に動かすことになる。そんなことが自分の体の中で起こっているとしたら、今後、自分の胃は、ブタの臭いにますます敏感に反応することになるのではないか。

「三橋さん」――深刻な気持になった沢井は、少し丁寧な言葉づかいになっていた。「そういう可能性は、臨床的に確かめられたのですか?」

「私は確かめていませんが、アメリカで交通事故で死んだ人を解剖した時、脊髄と胃の筋肉の間に普通の人には見られない長い神経が通っている例が一件だけ報告されています」と、三橋は語調を変えずに言った。

「それで」と、沢井はたたみかけるように言った。「その人はブタの胃を移植していた?」

「胃だけではありません。肝臓も腸も……」と三橋は言った。

沢井は、診察用の椅子から身を起こして、後方にいる三橋の方を振り返っていた。両手を肘掛けの上に突っぱり、背中の筋肉がよじれるほど力を入れて体を捻じ曲げ、眼は三橋の顔を睨みつけているのだった。

三橋は、その視線から逃れるように脇へ目を逸らして言った。「しかし、多くの症例の中のたった一件ですから、沢井先生のケースは別のことが原因かもしれません」。声の調子は悔しいほど冷静だった。

沢井がひねった体をもとに戻して椅子に背中をあずけると、三橋は何かを言い忘れたのか、沢井の前まで歩いてきた。

「連想関係を断ち切るための荒療治があるんですが……」

目を細めた三橋の表情は、「あまりお勧めできない」と言っているようだった。

「どんな治療?」と沢井は不安げに言った。

「ブタに同情する気持がこの症状の原因と思われますから、それを起こさなくするのです」と言って、三橋はまた目を細めた。

「どうやって?」と沢井は言った。

「子ブタを自分で潰す体験が有効な場合があります」と言って、三橋は壁の方に目を向け、それから念を押すように言葉を継いだ。「成功する場合と、しない場合がありますが……」

沢井は「潰す」という意味をすぐに了解した。屠殺するのである。それが

心理療法だというのだ。沢井は椅子から立ち上がった。何か急に怒りがこみ上げて来た。気がつくと、自分の胃袋は盛んに収縮しているのだった。

署名は検証されていません。
Masanobu Taniguchi
電子署名者：Masanobu Taniguchi
DN: cn=Masanobu Taniguchi, o=Seicho-No-Ie International Headquarters, ou=Vice President, c=JP
日付：2002.09.16 22:44:27 +09'00'
理由：この文書の著者
場所：Tokyo, JAPAN